

買って頂いた方に

喜んで頂きたい!

桐匠 高橋工房

店長 高橋敏之さん

家具職人として半世紀、そして総桐筆筒を手がけて三十年のキャリアを持つ、桐筆筒職人高橋敏之さんを紹介しよう。

今年、一月にアクロス福岡で、鐘ヶ江典夫さん（工房かねよし 二月号夢追い人）と共に二人展を開いたが、大きな反響があった。この模様は朝日新聞にも取り上げられた。

高橋さんの作りあげる作品は、渋く、重厚な佇まいのある、手作り高級桐筆筒。しかも

すべての工程を一人だけで作りあげる。それには家具産地大川でも独創的と言える技術がちりばめられている。

さて、昭和五十年頃、家具メーカーで職人として働いていたとき、オイルショックを経験する。「そのとき、量産家具の限界を感じましてね。そして手作りの桐筆筒作りに心が動きました。」その後、家族から離れ、桐筆筒の本場、埼玉県春日部市のある桐筆筒職人のもとで、一年数ヶ月、桐

筆筒作りの基礎を徹底的に学んだ。厳しい師匠だった。そこで作る桐筆筒は一本数百万円の超高級品ばかりだった。その後、大川に帰り、春日部の技術と大川の技術を融合させながら、作品の質を磨き続けた。感性を研ぎ澄ますため茶道や華道も学んだ。「特に茶道は役立っていますね」と、にこやかに言われる。こうして三十年、桐筆筒職人として修練を重ねてきた。製作の過程を少し聞いてみた。



焼きを入れながら、材を整えていく



、もっと大切なことはその後ずっと材に狂いが生じな

高橋さんの作りあげた高級桐筆筒は、洗く、重厚な佇まいがある



矢車の実



砥の粉



うつぎ(木製の釘)

い点です。これは、春日部で学んだ技術です。でもこれが正攻法のやり方だと思えます。」
塗布する、矢車の実の煮汁と砥の粉との調合も繊細な感覚を使う。砥の粉にも、赤や白や純白と言った色合いがあるのだ。調合のための水にもこだわりがある。「いろいろな水を求めて、さまざまな場所に行きましたね。でも今使っているのは佐賀県の富士町の温泉水です。鉄分が少なめで良い水です。」
うつぎ(木製の釘)を打ち



”焼き“を入れる
大川では高橋さんだけが行う技術

込むのは、耳が頼りだそうだ。「桐は柔らかい木です。桐が割れるぎりぎりまで打ち込む力加減はかすかな音を聞き分ける必要があります。」うつぎは前もってフライパンでカラカラに煎っておく。「打ち込んだ後、水分を含ませます。そうすると、膨張して、鉄よりしっかりと強度を出せる」からだ。
そしてカンナでの仕上げ。もちろん機械よりも美しく仕上がるそう。そのためにカンナの歯を砥石の上に立つ様に、正確に磨き上げる。刃先が



本当に均一になると実際に立つそう。だ。
桐筆筒の良さを聞いてみた。「桐より高級な材はありますが、中の衣類を守る物入れとしては、王様だと思えます。吸湿性に優れていて、梅雨時でも湿気が中に入りません。筆筒の中に入った物やそれにまつわる思い出を長く守ってくれます。」
夢を聞いてみた。「一本作るたびに、こうすれば、ああしていれば、いつも思いますよ。本当に発展途上です。買って頂いた方に飲んで頂く製品作り、体が続く限り励んでいきたいですね。」